ふうど

想い｜つくる｜伝える

［Fuud］
2025
冬号
季刊

甘くて深いお話

2025 Eye's
新潟ここだけ物語

Take Free
ご自由にお持ちください

色彩が封印される雪国に、ひと足はやく春の賑やかさを運んでくる砂糖菓子。ビビッドな日本の伝統色をまとった天神さま・だるま・福助などの縁起物が、100年以上もの間、雪解けを待つ地元の人たちを静かに励ましてきた。（燕市 株式会社さかたや製と小松屋菓子舗製）

がんばろう●ニッポン!

わたべ
カメラマンの
ふうど
取材メモ 16

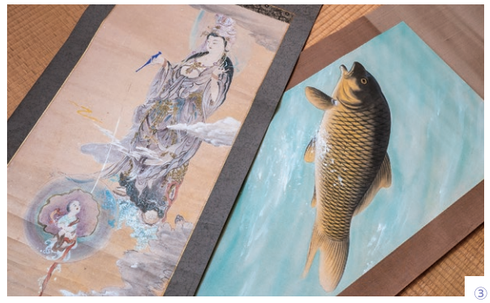
今回の取材テーマ
農民画家の天神様

①

「えびがせ天神様まつり」を取材した帰りの車中で思い出した。「そう言えば、我が家にも天神様（菅原道真）の絵があったはずだ」。家に着き早速、押入れをゴソゴソ。「おお、あった!」60年ぶりぐらいの再会である。

私が5、6歳の頃の話。見附市の祖父の家に遊びに行った時、祖父の友人が囲炉裏の前に座っていた。「この人は絵が上手らすけ、何か描いてもらえ」と祖父。その人は笑顔で、私の手元にあった「ゼロ戦はやと」の漫画本を手に取ると、チラシの裏にササっと漫画のひとコマを模写した。私は「すごい」と思ったくせに、「オレのほうが上手いな」と強がりを言ったので、周りは大笑い。

しばらく経ったある日、母が「ほら、この前のじいちゃんが、『お前が勉強できるように』って、天神様の絵をくれたよ」と菅原道真が描かれた掛け軸絵を持ってきた。「今度表具をして、掛けてあげるからね」と言っていたのに、果たされず忘れられていた。


③

押入れから取り出した絵を見ながら、作者について知りたくなった。しかし、本人はもちろん、私の親も他界しているので、年上の従兄弟に電話してみたら、その人を知っていた。おかげで後日、作者の息子さんとお会いすることができた。

②

その農民画家は松永太平（たへい）さん、雅号は寿松（じゅしょう）と名乗っていた。「オレが子どもの頃から、父はいつも茶の間で描いていましたよ」と息子の利雄さん。鯉や美人画を得意とし、美術展での入賞や著名な画家との交流もあったという。私がもらった天神様はずっと仕舞われていたので、太平さんには、申し訳ない気持ちだ。もし私に孫ができたなら、ちゃんと表具をして、日本人が天神様に託してきたその想いを、つなげていかなくてはと思った。

写真、文章／スタジオF(t)　渡部 佳則

①もらった天神様の掛け軸絵。（部分）
②松永太平さんは明治36年生まれ、84歳で亡くなった。
③松永太平さんの残した掛け軸絵。（松永利雄さん所蔵）

編集後記

天神菓子を探る特集は、いかがでしたか。近年まで家庭で行われてきた菅原道真を偲ぶ年中行事に、時空を超える大ストーリーがあり、風習を次代につなげようとする住民や菓子職人たちのおかげで、その一端をリアルに知ることができた。新潟市海老ヶ瀬では宗教色の強い祭りを楽しみ、何の屈託のない笑顔を見せたこどもたちが印象に残る。秋葉区では、いまも小学校の給食に天神菓子がつくという。油断すれば時流に埋もれる心の文化を、持ち堪えようとする人たちの胆力と未来志向の慧眼にリスペクトされた。なお天神菓子の製造現場を見せていただいた燕市のさかたやは、明治30年に創業した老舗菓子店で、大河津分水路の建設工事で町中が湧いた頃、家業が飛躍的に発展したそうだ。地域の経済力が伝統文化を支える必須条件だったのか。それなら、なぜ比較的恵まれていた新潟市の中心部で、天神文化が薄いのか。取材当初に抱いた謎は未だ解けず、モヤモヤが消えない。（渋川）

ふうど 2025冬号 vol.67
企画編集　ふうど編集室
発行人　高橋　佑
取材編集　渋川綾子
佐々木聰
写真　渡部佳則
デザイン　斎藤遵司
題字　小林　翠

発行所
株式会社タカヨシ　ふうど編集室
SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS　私たちは新潟の食、文化、風土の伝承を通じて持続可能な開発目標（SDGs）を支援しています。
■本社・工場／〒950-0141 新潟県新潟市江南区亀田工業団地1丁目3-21　TEL（025）381-2000 FAX（025）381-4800
■東京支社／〒113-0034 東京都文京区湯島3丁目24-11 湯島北東ビル2階　TEL（03）3837-4488 FAX（03）3837-4884
■上越営業所／〒943-0805 新潟県上越市木田2丁目1番1号 上越セントラルビル5階-2　TEL（025）381-2000 FAX（025）520-7049
■東北営業部／〒980-0011 宮城県仙台市青葉区上杉3丁目3-47 上杉オオウラビル501号室　TEL（022）266-1711 FAX（022）266-1712
■東海・関西営業部／〒464-0025 愛知県名古屋市千種区桜が丘295番地 第8オオタビル7階　TEL（052）753-8080 FAX（052）753-8081
■オフィシャルサイト／https://www.takayoshi.co.jp

「ふうど」はここに置いてあります
【新潟市】<中央区>ANAクラウンプラザホテル新潟、NST、上古町商店街、旧小澤家住宅、県立自然科学館、砂丘館、佐藤商会、佐渡汽船ターミナル、田中屋本店みなと工房、朱鷺メッセ、新潟絵屋、新潟 加島屋本店、新潟県庁広報展示室、新潟県民会館、新潟県立図書館、新潟国際情報大学 新潟中央キャンパス、新潟市市民活動支援センター、新潟市生涯学習センター、新潟市食育・花育センター、新潟市立中央図書館、新潟商工会議所、新潟市歴史博物館、新潟ユニゾンプラザ、ピアBandai、ホテルイタリア軒、ホテル日航新潟、りゅーとぴあ新潟市民芸術文化会館　<東区>新潟空港、パティスリーカフェオルレアン　<西区>新潟ふるさと村、新潟大学附属図書館、佐潟荘　<南区>新潟市農業活性化研究センター　<北区>新潟せんべい王国、ビュー福島潟、潟川公民館<江南区>介護老人保健施設亀田園、新潟市立亀田図書館、北方文化博物館<西蒲区>カープドッチ、ドメーヌ・ショオ　<秋葉区>カフェギャラリーやまぼうし、川内自動車、新津鉄道資料館
【新発田市】加治川地区公民館、紫雲寺地区公民館、新発田市生涯学習センター、新発田市民文化会館、新発田市立図書館、豊浦地区公民館、ホテル華鳳　【聖籠町】聖籠観音の湯 ざぶーん
【村上市】イヨボヤ会館、村上市観光協会　【長岡市】新潟県立歴史博物館、長岡市立科学博物館、長岡大学、長岡市立中央図書館、やまこし復興交流館おらたる　【燕　市】分水ビジターサービスセンター　【加茂市】椿の家
【出雲崎町】越後出雲崎天領の里　【十日町市】十日町市観光協会、十日町市博物館　【南魚沼市】欅苑
【上越市】上越観光コンベンション協会、上越市立水族博物館うみがたり、上越市立高田図書館、上越市役所、上越あるるん村
【佐渡市】SADO伝統文化と環境福祉の専門学校、ホテル大佐渡、佐渡市立図書館
【東京都】<中央区>ブリッジにいがた　<千代田区>新潟市東京事務所
本誌に掲載されている写真等の無断転載はご遠慮ください。

エコプレスバインダー　針金・糊・加熱が不要な製本方法を採用し、リサイクルや怪我の危険へ配慮しています。
RICE INK　この印刷物は環境にやさしい米ぬか油を使用したライスインキで印刷しています。

勉学のパワーフード

新潟にはユニークで、かわいい行事菓子がある。学問の神様とされる菅原道真をもてなす天神菓子である。毎年、受験シーズンを迎える一月から道真の命日にあたる二月二十五日まで、県央地域の燕市を中心とする菓子店や道の駅などで、さまざまな形の菓子が、ほっこりオーラを発する。なぜ、この地域に昔ながらの菓子が健在なのか。そして天神さまの行事とは、いったい何だろう。

想い　菓子が教える心模様

頭が良くなりますように

そもそも天神って、何のこと？

平安時代、中級貴族にもかかわらず、異例のスピード出世で国の中枢を司る地位に上りつめた菅原道真が、神格化してからの呼称である。正式な神号は『天満大自在天神』。その末尾を庶民は親しみこめて、天神さまと呼んだ。ひと昔前までは道真＝天神さま、そして道真を祀る天満宮や菅原神社を天神さまと総称することは、誰もが知る一般常識だった。しかし伝統に疎い新潟の湊町育ちには知る機会がなく、天神さまの意味も、家庭で天神さまを偲ぶ年中行事が県内にあることも知らずにきた。

数年前の二月、燕市の大河津分水路の下流に近い道の駅国上で、天神菓子を初めて見た。シンプルな造形とキッチュな色遣いに惹かれ、しばらくその場を動けなかった。すると地元の人らしい初老の男性が話しかけてきた。「このあたりでは天神さまの日が近づくと、菅原道真が描かれている掛け軸を飾り、その前に小さな机を置き祭壇を作ります。祭壇には松竹梅を活け、御神酒と天神さまの好きな五目ご飯と煮しめと、この天神菓子をお供えするんですよ。その机の前で勉強すると『頭が良くなる』『字が上手になる』と親から教えられ、素直に従ったものです。そして道真の命日の夜に、お下がりの菓子を貰うんですが、その時の美味しさは格別でした」と幸せそうに語ってくれた。さらに、その天神菓子を食べても『頭が良くなる』とも言われたそうだ。ええーっ、砂糖の塊みたいな菓子を食べる？ 頭に効く？ 現代の感覚では信じ難いことを、昔の親はこどもに普通に教えていた。その発想は、どこから来るのか。国内外の伝統菓子に詳しい菓子文化研究家の溝口政子さんに、天神さまと菓子の関係を聞いてみた。

造形に宿る心

「確かに天神さまのお下がりを食べると頭が良くなるという話は、天神菓子が盛んだった地域の方から、よく聞きます。それは天神さまに限らず、神にお供えしたご馳走を人間が食べると、神のパワーを体内に取り込むができるという思想にあやかったものです。学問の神様として知られる道真公ですから、お供えした菓子を食べれば学力が向上すると、昔の人は考えたわけです」。そうか天神菓子は、天神さまのためのものだった。見た目の面白さばかりに気をとられ、菓子の本来の目的を知らなかった。では、なぜ県央地域の天神菓子は、松竹梅・海老・鯛・鶏などのいろんなモチーフがあるのか。

「神様を喜ばせるお供え物は、社寺ならその土地でとれた新鮮な野菜・果物や魚介類ですが、庶民には豪華な食材を揃える経済的な余裕はありません。その代用として神饌に似せた砂糖菓子が作られました。

式菓子用の砂糖菓子を作る多種多様な木型が老舗菓子店に伝わっており、安価に製造できたので一般家庭に浸透しやすかったのでしょうね。それらの造形は心が浮き立つ目出度いものばかりです。

はじめは真っ白だった天神さまが、絵付け歴61年の職人によって彩色され、みるみる命が吹き込まれていく。親娘三代にわたり技法が受け継がれてきた。（燕市 株式会社さかたや）

粉菓子を成型する木型。ここに餅米の炒り粉と砂糖を合わせた材料を入れ、成型する。（燕市 皆川菓子舗の木型）

天神さまのお祝いの行事ですから、より華やかで賑やかなものが好まれました。松竹梅や鯛など慶祝の定番モチーフにも、菓子店それぞれに個性があり、その違いを見比べるのも新潟における天神菓子の楽しみのひとつです」。そっか、天神さまも可愛らしい菓子を、毎年楽しみにしているのかな。

でも天神さまにお供えするための菓子なのに、なぜ拝む対象である天神像の菓子があるのか。「それは比較的近年の傾向のようです。三条や与板などでは、定番の慶祝菓子だけを箱に詰めてお供えする、昔の流儀が残っています。一方、掛け軸や人形を祀る家庭が少なくなってきた地域では、季節の到来とともに天神像だけは飾りたいという気持ちは廃れずにあり、そのニーズに菓子店が応え天神像の菓子が次第に広まったのではと思います」。

ちなみに県央地域の天神菓子は、砂糖と餅米の炒り粉を木型で押し固めた『粉菓子』と、砂糖を熱した液体を型に流して形を作る『金花糖』の二つの系統に、近年は生菓子も加わっている。

こうした砂糖の天神菓子と底通する風変わりな行事菓子が、太平洋を隔てたメキシコにもあるそうだ。そのモチーフは、なんと頭蓋骨！

メキシコでは十一月二日を『死者の日』として、日本のお盆と同じような先祖を迎える伝統行事がある。その日は各家で祭壇を設え、金花糖の頭蓋骨を飾り、先祖の好物などを供え亡くなった家族をもてなすという。これはマヤ文明の時代からの古い習俗に基づくもので、昔は本物の頭蓋骨を飾っていたそうだ。しかし大航海時代にキリスト教布教のために渡来した宣教師が、頭蓋骨の代わりに当時高価だった白砂糖のお菓子に替えさせて現在に至っているという。

菓子文化は、思いのほか広く深い。

春らしい色合いとぷっくりした表情が目を惹く道真公の粉菓子。手慣れた職人しかできないという『すり蜜』の技法を駆使し立体感を強調した伝統的な天神菓子。（見附市 お菓子 田の口屋製）

新潟県の天神文化

ところで、なぜ燕市周辺は伝統的な天神菓子がいまだに健在なのか。

「燕市の国道一一六号線沿いの地域は、良寛さんが壮年から最晩年を過ごした場所で、良寛と親交をもてる知識人が多くいました。歴史のある菅原神社が鎮座し、優秀な人材を輩出した私塾もあり、道真公への崇敬心に篤い土地柄で、一般家庭でも広く命日に道真を偲び、学力向上を願う行事が行われていました。そうした風習を地域の個性として着目し、十数年前から行政が主導し、家庭の伝統行事の再発掘と、昔ながらの天神菓子の販売促進に力を入れてきました。道真公の命日と受験シーズンが重なることから注目され、市内の多くの菓子店が天神菓子を作るようになったのです」。

新潟県全体の天神信仰について、各地の市町村史を調べると、意外に広い地域の家庭で天神さまを祀り、その前でこどもたちが勉強をしていた。また、こどもが主体となって運営する天神講もあったが、それは信仰というより、こども同士のお楽しみ会の要素が強かった。生徒の学力向上のために学校単位の行事もあったが、戦後、宗教色が強いということで中止した地域もある。でも溝口さんは、それらの行事はひとつの側面で、柏崎市は天神さまを年の神として捉え、旧家では年内中に江戸時代の天神像や掛け軸を祀り、お正月に鮭の一のひれをお供えする。そして、一月二十五日に片付けるという。さらに「雪深い新潟における天神さまの行事は、自然の命が再生する春の到来を喜び、一年の家内安全と五穀豊穣を祈ることに重要な意義があります。厳しい冬があってこその天神さまです」と言を強めた。

こどもたちと天神さまの関係性を実感できる、地域の天神さま祭りが新潟市の海老ヶ瀬で続いているというので、さっそく現地を訪ねた。

メキシコの伝統行事『死者の日』に先祖を迎える祭壇に飾る頭蓋骨の金花糖。亡くなった人の名前が書かれている。（提供：溝口政子）

お上手でした天神経

つくる　隠れた宝物

時代は変われど

天神さまとして慕われている菅原道真に唱える『天神経』という経文がある。江戸時代の寺子屋で毎日もしくは毎月二十五日の道真の月命日に、学業や人格のアップデートを願い生徒たちは『天神経』を唱えていた。経文の内容は仏教思想に基づく厳格なものではないが、民間信仰として広く全国に浸透していた。しかしいまは用いられることはなく、微かな記憶も消えかけている。ところが、どっこい！ なんと新潟市東区海老ヶ瀬に、こどもたちが地区の一般家庭に祀られた天神さまの前で、『天神経』を唱える伝統的な祭りが脈々と続いていた。それも近年急速に都市化した町のすぐ隣の地区である。こどもの減少による四十年近くのブランクを超え、平成十八年に行事を復活させ、コロナ禍の休止期間を過ごし、四年ぶりに祭りが行われた。

まだ冬の厳しさを残す二月二十三日の昼下がり、防寒具に身を包んだ地区のこどもたちが付き添いの父兄とともに、やや緊張した面持ちで底冷えのする集会場に集まってくる。参加者は、事前に申込みをしていた保育園児と小学生の二十五人。初めての天神経を数回練習した後、地区に点在する六軒の家々を回り始めた。時折、雲の切れ間から太陽が見えたものの寒風が肌を刺すなか、こどもたちは立派な屋敷や蔵がたち並ぶ、純農村の面影を残す地区を友達と喋りながら楽しげに移動していく。

みるみる上達する天神経

一軒めの家に到着。座敷に仕来りどおりに祀られた天神さまの前に勢揃いし、みんなの息が整い座が静まるや、『てんじんきょう！』と導師役の年長の男の子が、元気な一声を発する。続いて『にょぜいがもいちじゅうぶつざい～』とみんなが一斉に唱和する。その清らかな声の重なりが座敷を満たし、冬の間に停滞していた空気を掃き清める清涼な音楽に聴こえる。集会場では遠慮がちだった声が音量を増し、しかもきっちり合い、こどもの吸収力の速さに目を見張る。

そして、その響きの先に三百年前のこどもの顔が浮かんできた。『天神さま祭り』は、学力向上と成長を願う地区のこどもたちのための祭りである。が、大人たちの方がこどもの目覚ましい成長ぶりに感動し、大勢のこどもが発するエネルギーを浴びる儀式のように見える。江戸から明治、大正、昭和、そして平成、令和と、こうした心を震わす世代間のふれあいがあったからこそ、長い時のブランクを超えられたのかもしれない。

お経が終わると家のご主人からお礼としてお菓子がプレゼントされ、みんなが嬉々として受け取っていた。あるお宅では、昔ながらの熱々の砂糖湯が準備されていて、それを初めて見るこどもたちの好奇な目を集めていた。こうして三人の導師が交代しながら五軒の家々を周り、最後の家に到着。お経のあと、ご主人の思い出話や天神さまの話を聞き、予定していた一般家庭での天神経の唱和が終わった。その後、集会場に戻り、集会場に祀られた天神さまに向かい祭りが無事終了したことを報告する天神経を声をあわせて唱えた。その時のお経は、二時間ほど前より遥かに素晴らしいお経だった。同時に、こどもたちの表情も達成感に満ちた、いい表情をし、受け入れ側の大人たちも、嬉しそうにこどもたちを見つめている。

祭りの世話人である高橋善輝さんは「コロナ禍の間に天神経を知っている子が中学生になり、三人しか経験者がいなくて、上手くやれるのか心配でしたが、とんでもない、みなさん驚くほどお上手でした」と目を細める。高橋さんが少年だった頃の祭りは、男の子が主役で、お供えの準備や回る家の連絡などこどもたちが自主的に行なっていた。いまは大人の世話人がやり、日程や時間なども時代に合わせて変更し、女の子も参加するようになったそうだ。こうして時代に順応しながら、先祖代々受け継がれてきた伝統が、やんわりと次の時代に渡されていく。

海老ヶ瀬のルーツ

でも、どうして海老ヶ瀬は天神さまへの崇敬心が篤いのか。

祭りの起源は定かではないが、庶民の教育熱が高まった江戸時代の海老ヶ瀬村に、二軒の寺子屋があったという記録がある。そこで唱えられた天神経が、いまに伝わっている。さらに阿賀野川の左岸に一村を立地しようとした先祖は、加賀国の高橋家をはじめとする八家だったそうで、その苗字の多くを住宅地図で確認できる。なお加賀を含む北陸地方は全国のなかで天神信仰が濃厚な地域。加賀をルーツとする海老ヶ瀬地区が、とりわけ天神さま信仰に熱心な背景に、先祖の歴史が隠れていた。

純農村の風格をたたえる海老ヶ瀬の家並み。

お経が終わりプレゼントをもらうこどもたち。

祭りの大役を終え笑顔がはじける。

一般家庭に祀られた天神さまの前で、25人のこどもたちが『天神経』を唱和する。

天神さまにお供えする五目ご飯と煮しめ。

この地区の天神菓子は餡を成形した生菓子。
新津の老舗菓子店から買ってくるのも決まり事。

昔からの地区の流儀で大根を剣山にして松竹梅を活ける。梅のない時期なので代わりに猫柳を活けるのも昔のまま。

千年経っても人気もの

伝える | はかなさへの共感

線香花火と天神さま

線香花火は、日本の侘び寂びを象徴する繊細な花火。めくるめく火花の変容の末、火の玉がぽつんと落ちた瞬間、人はしばし心を沈潜させる。こんな瞑想的な線香花火を、天神さまの日に室内でやる風習が新潟市秋葉区に残っていると、前々項の溝口政子さんが目を輝かせて話していた。

えっ冬に花火？ それも室内で？ なぜ線香花火？ あまりに意外な事実に頭が混乱したが、半信半疑のまま天満宮が鎮座する古田（こだ）地区で話を聞いてみた。すると八十代の女性ふたりが声を揃え『やったよ。こどもの頃、このあたりの家では、みんながやってたよ』と事もなげに話す。だが七十代の男性は『やってない』と言下に否定した。ここでは線香花火の風習は廃れたようだ。

次に『鉄道のまち』として名高い、新津商店街に向かう。三年前に小誌の取材でお会いし、新津の歴史に詳しい村木呉服店の村木政寛さんをアポなしで訪ねる。村木さんは、いまでも父親がしてくれたように、こどもたちのために線香花火をしているという。ただ火事が心配なので、外でやるようになったそうだ。そして昔は二月になると新津の菓子屋や文房具店で、線香花火が山積みになって売られていたと、天神さまの日が近づく街の賑わいを振りかえった。

また地区の保育園では、カーテンで室内を暗くし、水を浸したバケツを囲み園児が花火をするという。隣の新町商店街では、地元有志による天神さまの祭りが毎年あり、現代風の催しものの最後に参加者全員で線香花火をするという。村木さんをはじめ、店に居合わせた人たちが口々に発する言葉から、極寒の二月の夜、線香花火の炎を見つめながら、家族がそれぞれに胸の中で天神さまを偲び、願い事をする茶の間の光景がありありと浮かぶ。

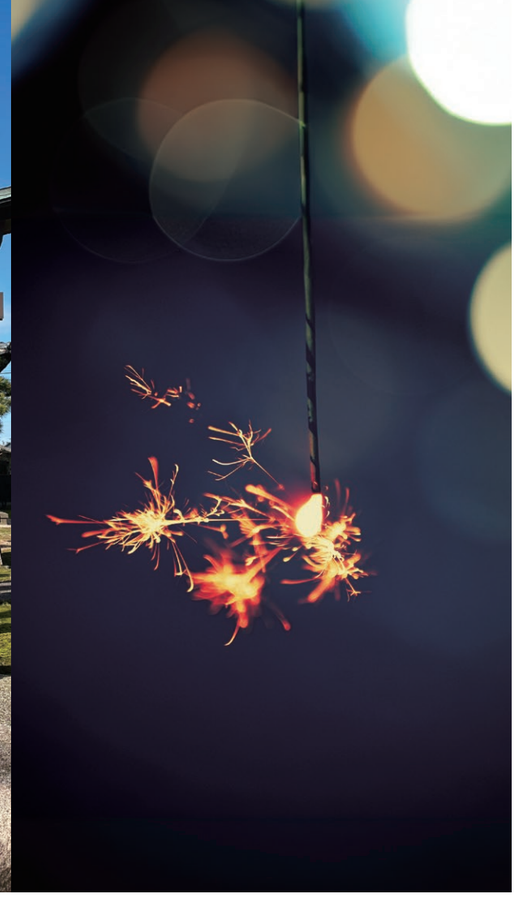
大庄屋の慈愛

でも、なぜ線香花火なのか。「このあたりの大地主、桂家の影響だと思います。江戸時代の花火は高価なもので、庶民が簡単に入手できるものではありません。また花火の火薬は武器になるので流通面でも規制があったでしょう。でも新発田藩新津組の筆頭庄屋で実力があった桂家は、雪に閉ざされる冬の領民の暮らしを思い、火花が牡丹・松・菊・柳に変わる線香花火を室内の楽しみのひとつとして奨励、または配付したのではないでしょうか」と村木さんは推測する。

そして桂家の天満宮について桂家の四代目当主は、新潟の関屋村から道真の系譜に連なる菅原家から、自分の娘の婿養子を迎え分家させています。それを機に桂家の所有地に遷座した秋葉神社の一画に、天満宮を創建しています。また桂家のルーツは、天神信仰が濃厚な能登半島の神社ですので、天神さまへの崇敬心は篤く、領民の教育に熱心でした」と説明する。

なお新津地区には、それほど広くないエリアに三つの天満宮があり、天神さまは暮らしのなかに溶け込んでいた。そこにこどもの好きな線香花火を媒介に、学問の神として親しみやすい道真公のイメージが浸透していったのだろう。

古田地区の守り神の天満宮。その近くに樹齢300年とされる八珍柿の原木が空を仰いでいた。



新津の村木政寛さんの家が大切にしている会津張子の天神さまと、お供えに欠かせない線香花火。火花の変化を4種類の花に例えた説明書を添える。

天神さまルーツのひとつ

ここで線香花火が盛んだった古田地区に話を戻す。古田では天神が雨をもたらすことから農業の神として、開村以来、天満宮を地区の守り神としてきた長い歴史がある。新津丘陵の高まりが尽きる平野部に位置する古田の近くには、古代から集落や湊があった。その地に村を草創した一人とされる溝江市右衛門が、九四九年（天暦三）九州から移り住み、近くの程島を大金を投じて開拓したという伝承がある。九州を発つ時、旅の途中で太宰府天満宮に立ち寄り神威を賜ったと伝わる。そのことから溝江家の家紋は、道真公の系統を表す梅鉢紋を用い、現在の天満宮の神殿扉に装飾されている。

公的な記録にも、江戸初期にすでに村が成立し天満宮を守り神としてきたとある。だから天神信仰の熱量は周辺地区を圧倒していた。そのひとつが昭和二十七年まで続いた、天神さまの命日の真夜中に行われた裸参りの荒行である。氷点下の気温のなか、丸裸で腰にしめ縄を巻いただけの青年たちが井戸水で体を清め、お百度参りしたという。襦袢にしめ縄を巻いた女性も参加したそうだ。ただ時代が変わると褌だけは締めたという。

そして裸参りが終わった翌日、氷の張った水田の溝きりを行い、新しい年の農作業を始めたという。また社の裏手に道真公が詠んだ梅の和歌にちなみ、青年たちが植樹・管理した大きな梅林があったそうだ。そんな地区の昔を記憶するお社はこぢんまりとしているが、境内も拝殿も手入れが行き届き、大きく開け放たれた扉の様子から、天神さまが、いまも地元に愛されていると知った。ここにも道真公が生きていたのだ。

『天神菓子』『天神経』そして『線香花火』。いずれも全国でも稀有な文化である。歴史の表面に記録されない小さな民俗だが、歴史を支えた庶民の健気な心をリアルに伝えてくれる。農業国新潟では、道真の勤勉で真っ当な生き方が、原野が広がる新潟平野に新天地を求めた開拓者たちに、励ましと勇気を与えていたのかもしれない。

没後一千年以上を経ても、菅原道真はチャレンジする庶民の傍に居続ける人気ものだった。

出荷作業を待つ金花糖の鯛

こどもたちが主役の天神さま祭りの様子。（2024年2月 新潟市東区海老ヶ瀬）